

全国大会をテーマに沿って 巡る有識者同行ツアー



小野寺民也 | 日本アイ・ビー・エム東京基礎研究所／本会長期戦略担当理事

第85回全国大会は2023年3月2日から4日まで電気通信大学にて開催されました。この大会にて、本会史上初めて「情処ツアー」なるものが催行されたので、その顛末を記します。

経緯

周知のように、全国大会は、毎年春の一大イベントで、盛りだくさんのコンテンツがあります。（なんらかの理由で）全国大会に参加することになった人は、どこをどう回ればいいのか、さぞかし頭を悩ましていないに違いない。「ツアー」のようなものがあるといいのではないか——かねてそんな思いを抱いていました。テーマに沿ってコンテンツをいくつか選び、それらを有識者と一緒に巡り、さらに、有識者の解説タイムも設ける、そんな「有識者同行解説の旅」です。

そして、2022年春に、翌年の全国大会で実現しよう一念発起しました。テーマは、時節柄、AIとメタバースがいいだろうとすぐに心は決まり、同行解説いただく有識者もそれぞれすぐに脳内に浮上しました。Preferred Networks PFN Fellowの丸山宏さんと、東京大学先端科学技術研究センター教授の稲見昌彦先生です。

まだまだ、妄想レベルではありましたが、5月に丸山宏さんと会う機会があり、おそろおそろ切り出してみたところ、妄想に寛容な丸山さんは興味を示してくださり、AIツアーの有識者を引き受けてくれました。

2022年6月7日には定時総会があり、本会理事でもある稲見先生とも会話することができました。その後、いくつか細目を決めて企画案もどきを作成し、7月に木下泰三事務局長と稲見先生とでビデオ会議を実施

し、おおむね次のような要領が決まりました。

1. 第85回全国大会にて実験的かつ小規模に実施する。
2. (バーチャルではなく) 現地ツアーとし、各ツアーは最小催行人数5名最大15名とする。
3. ツアー参加費は、全国大会参加費とは別に5,000円とする。
4. ツアーのセッション数は1時間30分×3程度とする。

8月22日には「2022年度全国大会運営委員会・第85回全国大会プログラム委員会 第2回合同委員会」なるものが開催され、ゲストとして参加し、企画案を説明する機会を得ました。そこで、無事ご承認いただくことができました。

年が明け、全国大会のプログラムが決まると、いよいよ有識者に、ツアーで巡るセッションを選んでもらうこととなります。大いに呻吟しんぎんされたことと思いますが、結果として、AIツアーは5セッションで解説時間合計225分、メタバースツアーは3セッションで解説時間合計135分という迫力のあるものとなり、2023年1月23日から参加者募集が開始されました。セッション等の詳細は募集サイト^{☆1}をご覧ください。

所感

初めての試みだけに、申込締切日の2023年2月24日までに果たして最小催行人数に達するか、企画者としては一抹の不安もありましたが、最終的に、AIツアー14名、メタバース12名の方々に申し込みいただきました。

そして、事務局はじめ関係各位のご協力により、ツ

☆1 <https://www.ipsj.or.jp/event/taikai/85/JosyoTour.html>

ア-を無事催行することができました。それぞれのツアーの様子については、参加者による体験記が掲載されていますので、そちらをご一読いただけると幸いです。

いくつか感想を述べます。まずは、参加者についてです。参加費を5,000円としたので、参加者は社会人だろうと想像しました。世代としては30代40代で、職種としてはテーマに関係する業務に従事していないし従事しようとしているITエンジニアが多いだろうと想像しました。

蓋をあけてみると、高校生や学部生といったジュニア会員の申し込みもあり、世代的にも上は70歳と幅広く分散しており、職種としても大学教員、会社の経営者、知的財産部門の方、土木関係の方等々、きわめて多様性に富んだものでした。

次に、有識者の解説についてですが、予想通り好評でした。参加後のアンケートには、「丁寧にさまざまな角度から話してください、大変に勉強になりました」、「発表内容の捉え方の視点を、解説により気付かされることが多々あった」、「プロの研究者ならではの視点から各発表についての解説をいただけて大変有意義な時間でした」、「分かりやすく発表のポイントや課題、その分野のトレンド等を解説いただき、とても貴重な体験となりました」といったコメントが寄せられています。

こうした反応はツアーで目論んだことであり、有識者の力量により達成できたことに、企画者としてもうれしい限りです。

予想外の展開もありました。ツアーでは、有識者が解説し参加者が視聴するという場面がほとんどで、情報の流れはほぼ有識者から参加者だろうと想像していました。しかし、実際に目撃したのは、参加者がそれぞれの立場から活発に質問し、それぞれの専門性から意見を開陳していくさまであり、有識者と参加者が一緒に^{かいちん}なってツアー空間をどんどん豊かなものにしていく有様でした。

実際、アンケートにも、「ほかの参加者の方々からの質問やそれを起点とする議論も興味深い内容ばかりで、非常に勉強になりました」、「多様な参加者の皆さんの考えも聞けて、とても有意義な時間を過ごせました」、「異

分野の方々からのコメントや質問なども新鮮でとても参考になりました」といったコメントが寄せられています。

これには驚きました。そして大会についていささか考えさせられました。

単純化していえば、大会の参加者は少数の発表者と多数の聴講者からなっています。そして、質疑の時間はありますが、大部分の聴講者は発表を聞くだけでセッションが終わったら次に移動するか家に帰ってしまうことでしょうか。いずれにせよ、このとき、発表を聞いた聴講者の心には、発表について納得もあれば疑問もあるでしょうし、共感もあれば違和感もあるでしょう。さまざまな反応があるはずですが、そうした反応は、誤解を恐れずにいえば、共有されることもなければ解消されることもない。そのような現状があるのだと思います。

全国大会における「聴講者体験」の向上は見過ごされた課題なのかもしれませんし、「情処ツアー」は期せずしてそれにささやかながらも対応した試みだったといえるのかもしれません。いずれにせよ、大会にはまだまだいろいろな可能性があるということなのだと思います。

展望

今回の大会で初めて実験的かつ小規模で実施した「情処ツアー」ですが、参加者からは、次回も実施してほしい、とのコメントを多くいただきました。総じて好評だったようです。と同時に、「実験的」イベントだったため、運営面の課題は残しました。第86回全国大会では、「正式な形」で実施できればと思っています。

最後に、本ツアーを成功裏に導いてくれた稲見先生と丸山さん、実験的イベントにもかかわらず絶大に支援いただいた事務局の後路啓子さん、そして、豊かなツアー空間を共創してくれたツアー参加者の皆様に深く感謝します。

(2023年3月27日受付)

小野寺民也 (正会員) tonodera@jp.ibm.com

1988年東京大学大学院理学系研究科情報科学専門課程博士課程修了。理学博士。同年日本アイ・ビー・エム(株)入社。現在、同研究所副所長、同社技術理事。